

やまがら

中学3年の卒業式当日がまさに2011年3月11日。浮かれた友人らとどんちゃん騒ぎをして家に帰るとTVで震災が起きたことを知った。遠方に住んでいた当時の私にリアリティーは一切なく、遊び倒す予定だった春休みが自粛モードでつまらなかった。

高校進学後、せっかくの高校生活も自粛やら復興やら未来を考えようやらといったムードを押しつけられたように感じて過ごしていた。また、私の高校は、当時の校長のトップダウンの決定で1つ上の高校2年の先輩たちが修学旅行で復興支援も兼ねて福島に行くこととなった。

某有名教育評論家が福島は見世物じゃないと私の高校を名指しで批判し、追隨した週刊誌でやたら叩かれ

た。帰ってきた部活の先輩たちはつまらなそうだった。私も高校2年の時の修学旅行時にやはり福島に行った。ある友人は放射能を恐れた家族に止められ、修学旅行に来なかった。部活に熱中していた私は、早く帰って練習したいなとか、適当に理由をつけて辞退して自主練すればよかったかと思ってしまったのを覚えている。現地の方たちは大歓迎してくださったが、正直リアリティーは感じず、お金を出してくれた親に申し訳なく感じた。

先日休みを取って双葉町に3泊滞在することにした。なぜか数年前から専門ではない環境経済の授業を担当する過程でエネルギー問題を扱っていたり、ずっと原発推進派の政党に投票したりしていたが、一度も原発事故に向き合っていないことが恥ずかしくなってきた、というのが主な理由だ。

双葉駅で降りたのは筆者だけ。駅前のカフェでは同い年の移住者の青年が働いていて、雑談を経て、研究者でなぜか専門ではない環境経済でエネルギー問題を授業で取り扱っていて云々～みたいな話をして仲良くなった。ほかに人はほとんどおらず、耕作放棄地でキジの鳴き声が響く。人がまばらな原子力災害伝承館には、自分以外、怖い目をした過激な推進派か過激な反対派しかいないように感じて、そそくさと出てしまった。気にせずもっとゆっくり見ればよかったと後悔して2日連続で行く。同じホテルに泊まっていたキューバ人のIAEAの技術

者は処理水のチェックに来ていた。処理水は何も問題ないから安心しろ！お前ら日本人はすごいぞ！と

双葉町に行った話

言っていた。話をした地元の方は、事故があっても原発は地元の誇りでもあったから恨めないとのことだった。

今後、電力を食うAIの活用には安価なエネルギーが大量に必要なことや中東情勢が不安定なこと、再生可能エネルギーには欺瞞があふれていることも理解している。一方、故郷を追われた方がいる中で原発を推進すべきかどうか、自分にはまだ分からない。現地に行っても原発をどうするべきか、自分の答えは出ない。ひとまず双葉町に貢献したいと思い、同町へふるさと納税をしてタオルを貰い、毎日風呂上りに使い始めた。原発への態度は保留し、ゆっくり迷いながら関わり続けるしか今の私に答えは出ない。

(ELK)